

会議名	平成 18 年度全国畜産関係普及指導員調査研究会 愛知県大会「人と環境に優しい畜産」
開催日時	1. 平成 19 年 2 月 22 日（木）～23 日（金）
開催場所	花の丸（愛知県知多郡南知多町）及び現地
主催者	関東東海北陸地域畜産関係普及指導員等連絡協議会 （社）全国農業改良普及支援協会
参加人数(概数)	約 80 名（県関係 72；普及、試験研究企画部門）、出席者名簿参照。
1. 会議の概要 （資料添付）	<p>我が国の最近の畜産は、消費者側と生産者側の両面からの多くの問題に直面している。一方、「豊かな農村の暮らし」、「人間と家畜の福祉」も重要な課題として登場してきている。また、新自由主義、市場原理主義、優勝劣敗の風潮は日本の畜産の持続性に大きく影響しようとしている。このような認識の下に全国の畜産関係普及指導員が一堂に会し、上記等の課題に取り組んでいる調査研究についての発表会および現地調査が、全国持ち回りの中で今年度は愛知県下で開催された。これに参加・出席して、収集した情報を報告する。</p> <p>（1）現地視察；（2月22日13：30～14：20）</p> <p>①（有）ミルキーファームの自動搾乳システム（半田市岩滑西町） 当初から、自動搾乳システムを基軸とした家族による乳肉複合経営を目指し、経営が順調に進展したことから同一機種 of 搾乳ロボットを3台に増やし、乳牛の群分けをしている。飼料は酪農協のTMRセンターから供給を受けており、哺乳ロボット、自動ふん尿処理装置なども導入して省力化を図っている。この地域の伝統的な乳肉複合の典型的な型。</p> <p>②半田市酪農組合協同飼料配合所（半田市平井町） 昭和50年に日本で最初に設置された共同配合（現在のTMRの原型）施設であり、当時の生ビール粕主体から乾燥ビール粕・粉碎とうもろこしに変わっているが、アルファルファヘイキューブなど輸入粗飼料により、安価なTMR飼料を組合員に供給するという基本的な考え方は変わっていない。しかし今後、輸入飼料の価格等の変動によっては、原料確保が困難になる状況の到来が懸念される。その対応策としても、“食品リサイクル法”“耕畜連携”関連飼料資源との連携が必要であろう。（研究発表⑧参照）</p> <p>（2）研究会；（22日15：45～23日12：45）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基調講演「21世紀における人・牛・環境に優しい畜産」 講師：酪農学園大学教授 森田 茂 氏 専門の家畜行動学の立場から、生産者の家畜福祉（アニマルウェルフェア）対応について、自らの豊富な試験研究データを基に牛の行動学的知見が家畜福祉の原点であることについて示唆のある話題提供が行なわれた。</li> <li>・研究発表；調査研究活動及び普及活動事例 <ul style="list-style-type: none"> <li>①「耕作放棄地を活用した放牧の取り組み」 今井洋彦（茨城県日立大宮農改セ）</li> <li>②「県内産肉用牛推進のための肥育成績と分析」 井上俊一（愛媛県畜産調査研究会）</li> <li>③「枝肉販売会における和牛の枝肉成績」 高畑孝一（福井県農試）</li> <li>④「剪定枝を活用した発酵床豚舎の導入支援について」 安藤貴洋（愛知県知多農改普及課）</li> </ul> </li> </ul>

	<p>立地は限られるが、都市部で集積される資源の有効利用法の一つと思われる。</p> <p>⑤「絶食法によらない採卵鶏の強制換羽法について」 宮川博充（愛知県尾張一宮農改普及課） 家畜福祉に関連して、この技術の普及も重要と思われる。</p> <p>⑥「自動搾乳システム（搾乳ロボット）導入による酪農経営への影響」 山谷勝宣（東京都西多摩農改セ） 導入後1年間経過し、牧場主はゆとり、後継者対策としても一応満足しているとのことであるが、その機能を十分発揮させるには到っていないようで、そのためのソフト面についての研究が必要。</p> <p>⑦「搾乳方法や牛舎飼養環境に関する農家調査とその分析結果を活用した乳質改善のための指導・支援」 近藤裕隆（福岡県朝倉農改セ）</p> <p>⑧「自動搾乳システムにおける基礎的なデータと分析」 安藤貴洋（愛知県知多農改普及課）</p> <p>⑨「裁断型ロールベアラーによる高品質サイレージ生産について」 小森賢寿（栃木県営農支援課）</p> <p>⑩「β-カロテンの簡易分析を活用した飼料イネの利用拡大への取組」 宮越雄一（新潟県経営普及課）</p> <p>⑪「牛ふん堆肥に残留する除草剤成分の検討」吉田宮雄（長野県中信農試専技室） 県内で発生した輸入粗飼料のホルモン型除草剤に起因する牛ふん堆肥施用によるトマトの異常生育問題に端を発し、原因解明、対策について県内外の行政、試験研究機関までを動かしてのプロジェクトの立ち上げから現場対応までの一連の報告である。</p> <p>⑫「待っているだけでは何も変わらない！」—たい肥利用促進、管内での耕畜連携の取組み— 手塚喜代美（静岡県志太榛原農事園芸畜産課） 畜産農家からの堆肥をレタスから茶まで、地域内で活用させるシステムを築き上げた。その行動力！。まさに、これからの普及員の鏡。</p> <p>⑬「家畜尿を再資源化し、飼料稲の追肥として利用」 澤田美和（鳥取県鳥取農改普及所）</p>
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる話題</p>	<p>基調講演から；我が国における家畜福祉の基準策定作業においては、家畜行動学専門家の参加を得て、現場の実態把握が重要と感じさせられた。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>研究発表⑥⑧「自動搾乳システム（搾乳ロボット）」；例えば、測定項目の内容についてメーカー（代理店）からのソフト開示の不十分な点が指摘された。搾乳ロボットについてはソフト面の研究開発課題も未だ重要な段階において、基本的な装置の外国製のみ頼らざるを得ない状況における問題点と感じさせられた。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>研究発表⑪に関連して；複数分野に係る飼料関連の問題についての情報網が欠けている事例の一つと考えられる。我が国で使われている飼料について、その成分、残留薬剤、産地情報などの蓄積・一元化がなされておらず、行政・業界・試験研究機関等を網羅した飼料情報に関するナショナルセンターの設置の必要性を強く感じさせられた。</p>

5. 会議の所感	普及員制度の改変により、その位置付け・役割が、専門性を高めて国の政策課題の調査研究、知的財産保全への取り組みまで拡げられているとのこと。これに応じて、畜産技術の研究開発に関する情報収集の範囲なども対応する必要があると感じられた。
報告者	針生 程吉